

川原尚行

認定NPO法人ロシナンテス
理事長 医学博士

川原尚行氏のスーダンでの医療支援活動はシエルフ・ハサバツラ村のリーダー、ハサン氏の家を拠点にして始まった。村人を含めてそれまでの経験で、当初外国人は支援に来てはすぐに離れていくと思っていたらしく、付き合い方は表面的だった。が、彼らが現地に居着いて活動を続けるのを見るうちに心の距離が縮まっていった。以来、2人の付き合いは20年近くになる。

村にある学校は、ハサン氏が「学校は大事だね。特に女の子には大事だよ」と繰り返し言うものだから、川原氏が日本大使館に働きかけ、「草の根・人間の安全保障無償資金協力」の支援を受けて建てたものだが、責任者であるハサン氏は字を書けず、受け取りの書類に必要なサインができない。それで地面に名前を書き、それを本人が懸命に覚えて難を逃れた。そこからスタートして、今では息子を大学へ通わせるまでになったとか。ある時、街でその息子に「ドクター！」と声をかけられたと言い、「その時は本當にうれしかったですね」と川原氏と満面の笑みを浮かべた。

今は離れているが、心の中に友が常にいる。それはハサン氏も同じはずと。川原氏のスーダンの人々に対する信頼と友情は、微塵も揺らがないようだ。



撮影◎戸川寛

外務省医務官から国際NGOへ アフリカの大地に根を下ろし、 「水」と「医療」と「教育」を届ける

紛争が続くアフリカ・スーダン。川原尚行氏は外務省医務官のキャリアを辞して認定NPO法人「ロシナンテス」を立ち上げ、この地を中心に村落部の医療支援を続けている。今年4月に軍事衝突が勃発して今は一時退避を余儀なくされているが、状況が落ち着けば戻って事業に力を入れたいと語る。アフリカの大地に根を下ろし、現地の人々が笑顔になる仕組みづくりに奔走する川原氏に、アフリカの過去と現在、そして日本と共に歩む未来を聞いた。

職を辞して個人で始めた スーダンでの医療支援

伊藤 川原さんはNPO法人「ロシナンテス」の理事長として、長年スーダンやザンビアの村落部に水と医療と教育を届ける活動に取り組んでいらっしやいます。現在に至る経緯は、どのようなものだったのでしょうか。

川原 九州大学の医学部を卒業して、外科の医局で修練を積んでから臨床大学院に入り、そこを出た直後に外務省に入りました。九州大学と外務省が提携関係にあって、外務省医務官（現地に勤務

する外交官とその家族の健康管理に当たる公務員）を募集しているのを知ったのがきっかけです。本屋さんに行った時に置いてあった地球儀を見て、「自分はちっぽけな日本しか知らない。世界ってどうなっているんだろうな」って。実はそれまで海外に行ったことがなくて、本当に邪な考えなのですが、1年だけでも海外に行ってみたい、日本を飛び出してみたいという湧き出る衝動にかられた。それが1998年、33歳の頃です。

伊藤 それで、初めての海外がアフリカだったと。川原 そうです。初めて手にしたのが一般のパスポートでなく外交パスポートだったのが今では笑えますね。海外に行ったことがないのに、家族を

連れてタンザニアに行きました。その頃のタンザニアは、よく停電になりましたし、断水もありましたね。そんな時に、ろうそく1本で過ごすとか、雨水で子どもと一緒にシャンプーしたりとかしました。そういうハンデイがある中だから、家族の結束が強くなるという感じでした。それと、自然と共に生きるというのをすごく感じましたね。

伊藤 今の時代こそ、そういうことを学ばないといけないですね。川原 本当、本当。物質文明で、いろんなものが溢れていても、人と人との本来の付き合い方、人と自然との付き合い方は、アフリカの人のほうが長けているんじゃないかなと思うところがありま